

特集：招待論文

グローバル大学学長式辞のテキストマイニング分析：
グローバル人材にふさわしい視座を嚮導できているか三上 貴教^A**A text-mining analysis of speeches by the
presidents of global universities in Japan:
Do they lead their freshmen to nurture global perspectives?**Takanori MIKAMI^A

Abstract: It is a common phenomenon that few students listen to their presidents' remarks at the entrance ceremonies. However, the presidents usually declare their universities' educational purposes and policies in those speeches. We should pay more attention to those speeches. This paper explores those speeches that explain how to lead their freshmen to nurture global perspectives. The selected leading universities receive huge public funds from the government. In this paper, I conducted a text-mining analysis in which I compared presidents' speeches with diet discussions on fostering globally-oriented students. The analysis revealed that the Japanese diet aims for some of the universities in Japan to be listed among the top 100 universities in the world and is less interested in educating for globally-oriented citizens. On the other hand, there are numerous insightful ideas and messages in the presidents' remarks. Therefore, those universities are successful in showing laudable educational global perspectives, while the diet discussions are relatively short of relevant arguments.

Keywords: university president speech, globally-oriented citizen, text-mining analysis, university ranking

1. はじめに

東京工業大学の学長は、2016年4月の入学式式辞を英語で行った。それを批判する声も存在した^[1]。しかし学長は、スーパーグローバル大学に選ばれた大学として、世界を視野に入れた教育・研究の展開に向けた打ち上げ花火的な効果を狙ったのかもしれない。学長式辞に対して反響が起こることはむしろ稀で、まして研究対象としてそれが注目されることもほとんどなかった。そうした学長式辞^[2]ではあるが、大学学事暦の最も重要なイベントの一つにおけるそれは、大学の針路を示すメッセージ性に富む言説であることは間違いない。新入生とその保護者、多くの教職員を前に学長は、大学のリーダーとしてその指針を新年度早々に語る。大学の教育研究の青写真が語られることも多い。

スーパーグローバル大学に選定された大学に対しては世間の関心も高い。そうした点を総合的に勘案して、ここではスーパーグローバル大学の学長式辞に焦点を当てて分析することにした。

スーパーグローバル大学は、文部科学省がスーパーグローバル大学創成支援として平成27年度から10年間に渡って支援する事業で、104校109件の申請があったなかから、トップ型13校、グローバル化牽引型24校の計37校がそれ選ばれた(文部科学省2014)。この説明によると、トップ型は徹底した国際化と大学改革により、我が国の高等教育の国際競争力を強化することを目的に、世界レベルの教育研究を行う。他方、牽引型は先導的試行に挑戦し我が国の大学の国際化を牽引する。日本全体の大学のうち、学生数および教職員数の約20パーセントをこのスーパーグローバル大学が占めることになるという。学生及び教員の外国人

^A 広島修道大学法学部

比率の向上、英語による授業の拡大、成果指標の設定と徹底した情報公開が課された要件となる。東京工業大学はトップ型13校の一つである。

「平成28年度行政事業レビューシート」(事業番号0145)〔事業名：スーパーグローバル大学事業〕に基づいて事業としての位置づけをより明確に示すと、これは「世界的に国境を越えた学生・教員の流動性が高まり、国際的な大学間連携の動きも進む中、我が国の大学の国際化は十分ではなく、世界的な大学ランキングでも外国人留学生の割合等が反映される国際関係の指標において評価が低い状況にある。本事業では、このような状況を打破するため、我が国の大学の国際化を強力に推進し、大学の改革を促し、国際競争力を向上させることを目的としている」(文部科学省2016)。

行政事業レビューシートには「成果目標及び成果実績(アウトカム)」が二つ、「活動指標及び活動実績(アウトプット)」が三つ並ぶ(文部科学省2016)。前者は①外国人留学生比率の向上、②外国語力基準を満たす学生数の比率の向上、を定量的な目標としている。後者は①外国語による授業の実施率、②ナンバリング実施割合、③専任教員の年俸制の導入、を挙げる。

外国語の授業の実施率を上げることで学生の外国語力向上を企図することは理解できる。しかし年俸制の導入やナンバリング実施をアウトプットとする事業を遂行しても、外国人留学生の比率の向上には直結しないだろう。そもそもの事業目的である大学の国際競争力の向上にはつながらない。この事業の論理モデルに問題が存在する³⁾。財政難のなかで巨費を投じる事業であるだけに、その効果を吟味する慎重な審議が国会には求められる。ここでの国会審議は水平的アカウントビリティに該当する⁴⁾。文部科学省の事業に対する有効性を吟味する場として、国会審議への期待もある。本稿でスーパーグローバル大学にかかわる国会審議を分析する意味の一つもここにある。

ところで *super global university* は和製英語であり、これを「SGU」との略称で呼ぶことにも法的問題がある。札幌学院大学が「SGU」を商標登録しているからである(朝日新聞2016)。計画としてはトップ型最大5億円、牽引型最大3億円を最長10年間支援する予定だったが、実際は2015年度平均支援額でトップ型が2億8800万円、牽引型が1億3100万円で、「まるで詐欺」との声もある(朝日新聞2016)という。

スタートから順風満帆とは行っていない。

2. 分析方法と先行研究

学長式辞の分析にはKH Coderという計量テキスト分析のためのフリーソフトを用いた。これは文章、語句を分析対象として、その特徴を視覚的に浮かび上がらせることができる。このフリーソフトを用いたテキストマイニングの先行研究は枚挙に暇がない。しかし、現時点でこれを用いたグローバル人材育成に関する議論は見つけられなかった。

またスーパーグローバル大学とグローバル人材育成を関連付けた論考も、まだそれほど多く存在していない。嶋内(2014)は、一般的なイメージとしてグローバル人材が「コミュニケーション能力や異文化適応能力を持ち、地球規模の問題に対し積極的に取り組み貢献することができる人材」(p. 109)とのとらえ方を紹介する。その上でグローバル人材に関連して語られる「日本人としてのアイデンティティ」概念についての分析を行い、さらにスーパーグローバルに限定されない裾野を広げたグローバル人材育成の必要性を指摘している(嶋内2004)。

本稿の議論の先に、今後の課題としてスーパーグローバル大学とそれに選定されていない大学におけるグローバル人材育成に対する視点を分析することがある。ただその場合、37校の学長式辞を大幅に上回るテキストが分析の対象となる。ここでは、文字通り文部科学省のいうトップ型、牽引型を代表として範囲的には限定的な分析となる。

以下ではまず「スーパーグローバル大学」に言及している国会審議における発言を、次いでスーパーグローバル大学学長の式辞を取り上げてテキストを比較する。さらにグローバル人材の定義で用いられる語句との関係性をクロス集計によって分析し、視覚化のために図示する。

3. 国会審議のなかのスーパーグローバル大学

スーパーグローバル大学支援事業について、文部科学省の狙いも含めてその意図を精査するための一つの試みは、国会審議の内容を検討することである。言うまでもなく、国会は国権の最高機関であって、国民の代表が様々な角度から政府の施策全般について質疑応答を繰り返し、政策の内容を吟味している。スーパー

グローバル大学に関しては多額の予算が投入されているだけに、2013年6月21日の衆院決算行政監視委員会においてこの語句がはじめて登場して以来、第190回国会を終えたところで最後となる2016年の5月11日までに、30回に渡っての言及がある。下は、下村博文文部科学大臣（当時）の委員会発言で「スーパーグローバル大学」が語句としてはじめて登場した段落の抜粋である。

「具体的に、海外大学の教育ユニットを誘致するとか、あるいは逆に日本の大学の海外展開を拡大するとか、国際化を断行するスーパーグローバル大学を、今後十年間で世界大学ランキングトップ百に十校ランクインする、今二校ですけれども、そういうこととか、留学生を倍増するとか、大学入学試験でTOEFL等を活用するとか、そういう具体的な提言をすることによって、各大学が日本の教育の方向性について理解していただいて、その方向に進めるような、そういう提言であるというふうに受けとめておりますが、もちろん、それ以前の段階として、日本人としてのアイデンティティを高めるための教育をするということは必要なことだと思います」（国会会議録 2013）。

さてこの下村発言を含めた30回すべての国会審議におけるスーパーグローバル大学への言及をテキストとして、共起関係を分析したのが図1である。これは品詞による取捨選択を、名詞、サ変名詞に限定し、最小出現数は15、描画数を30にした結果である。この共起ネットワークは出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク（樋口 2014）である。コマンドにより、出現回数大きい語をより大きい円で、結びつきの強い語を太い線で表すことができる。円の色は「中心性」を表していて、それが濃いほどネットワーク構造のなかで中心的な役割を果たしている。本稿においてもそうした図示となるコマンドを使用した。

この共起という概念について10年近く前からKH Coderを活用して論文を発表している橋本（2007）の説明に依拠して補足すると、たとえば句点から句点までの一文のなかで、「大学」という語とともにどのような語が登場するか、すなわち「大学」という語と「共起」しているのはどのような語であり、またその連関の強さはどの程度かを捉えるものである。連関の強さは「大学」という語が含まれている一文のなかで、あ

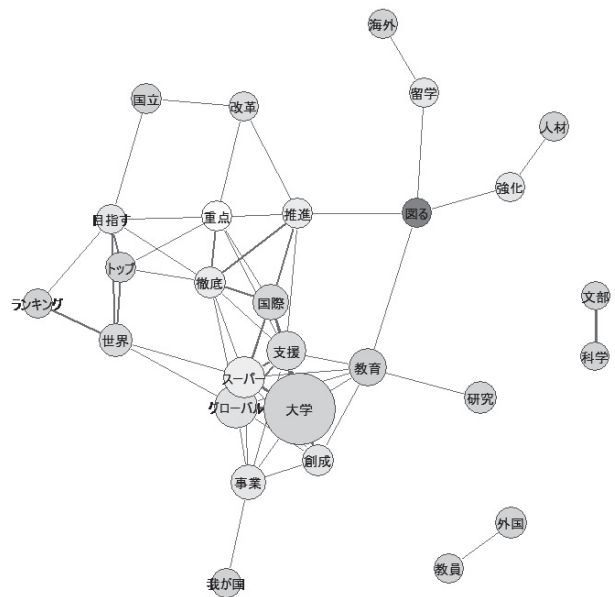


図1 国会審議共起ネットワーク

る語が常に使われているなら当然強く、使われる頻度が低ければ弱くなる。なお樋口の説明では、語句の位置にはあまり意味はなく、線で結ばれていなければ共起関係にはない。線で結ばれている語同士は互いに近づくが（樋口 2012）、結ばれていない語同士はそうではない。

さて、あらためて図1を確認すると左側に「ランキング」という語が登場する。周辺の語も含めて、ここでのスーパーグローバル大学は世界大学ランキングにおいて日本の大学が上位に入ることを眼目としたプロジェクトであることがわかる。「文部」「科学」と「外国」「教員」は他の語句と線で結ばれていない。しかしこれら以外の語句はどれも線で結びついている。「図る」が中心的であるのは、事業として大学を支援して、その国際競争力強化を促すことに力点が置かれていることの表れであろう。

4. 学長式辞

続いて学長のスピーチを分析する。文部科学省（2014）が選定したスーパーグローバル大学は、具体的にはトップ型が表1にある13大学、グローバル化牽引型が表2の24校である。この内、東京医科歯科大学、名古屋大学、大阪大学、京都工芸繊維大学、芝浦工業大学、上智大学、東洋大学、創価大学はそのホームページで学長式辞を探し出すことができなかった。そのため本稿での分析の対象外とした。

表1 トップ型大学

北海道大学	東北大学
筑波大学	東京大学
東京医科歯科大学*	東京工業大学
名古屋大学*	京都大学
大阪大学*	広島大学
九州大学	慶應義塾大学
早稲田大学	

*は分析対象外

表2 牽引型大学

千葉大学	東京外国語大学
東京芸術大学	長岡技術科学大学
金沢大学	豊橋技術科学大学
京都工芸繊維大学*	奈良先端科学技術大学院大学
岡山大学	熊本大学
国際教養大学	会津大学
国際基督教大学	芝浦工業大学*
上智大学*	東洋大学*
法政大学	明治大学
立教大学	創価大学*
国際大学	立命館大学
関西学院大学	立命館アジア太平洋大学

*は分析対象外

学長式辞のすべてを紹介する紙幅はない。例示として、この文部科学省事業において最多の支出額である東北大学の総長の式辞の一部を紹介したい。

<東北大学>

東北大学へ入学した皆さん、誠におめでとうございます。・・・中略・・・

皆さんが学ぶ権利を得たこの東北大学には、誇るべき強みや魅力が数多くあります。本日は、それらのいくつかを紹介するところから話を始めたいと思います。

一つ目は、「歴史と伝統のある世界トップレベルの研究型大学である」ことです。・・・(中略)・・・

三つ目は、「国際性の香り高いグローバルな大学である」ことです。

東北大学は、100年余も前から世界に開かれたグ

ローバルな大学として、常に新たな時代を切り拓いてきました。本学のキャンパスも小さな国際社会であり、日本各地はもとより、世界の90カ国以上の国・地域からの外国人留学生が学んでいます。

そして現在、東北大学は、「東北大学グローバルビジョン」を打ち出して、日本の大学という存在を超え、ワールドクラスへの飛躍を目指して様々な取組を展開しています。とりわけ教育面においては、平成26年度に文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援(トップ型)」13大学に採択され、海外研鑽を中心にして語学やコミュニケーション力、国際教養力、行動力を鍛える「東北大学グローバルリーダー育成プログラム」(TGL)を実施しています。英語で学位を取得できる「フューチャー・グローバル・リーダーシップ・プログラム」(FGL)でも卒業生を輩出し、来年度からは留学生だけでなく日本人学生を対象としたコースも設置します。海外の有力大学との国際共同大学院プログラムは、昨年度のスピントロニクス分野を皮切りに、本年度は環境・地球科学分野でも開設し、データ科学分野などがそれらに続きます。そのほか、ノーベル賞受賞者クラスの卓越した研究者を招聘し、1ないし3カ月本学に滞在する中で、皆さんと自由闊達に議論する「知のフォーラム」という場を設けています。本学では、早い時期からの海外武者修行を奨励し、海外留学を支援する奨学金も準備しています。私も初めて海外に出た若い時代の経験を今でも忘れることはありません。皆さんには、是非、こうした修学環境を大いに使いこなしていただきたいと思います。

好むと好まざるとにかかわらず、私たちは、これまで以上に、急速かつ大規模に進むグローバル化の影響にさらされていくでしょう。具体的な予測は難しいものの、人類社会が直面する課題の解決を目指して知的な格闘を続けていかなければならないことだけは確かです。東北大学で学ぶ権利を得たということは、その知的な格闘のために自らを鍛える時間と場を皆さんは与えられたということだと思います。つまり、皆さんにとってこれから大切なことは、東北大学に入学したという「学歴」ではなく、本学で学ぶ権利を得たことをどのように活かして自分の中に知の拠点を作り上げていくかという「学習・学問暦」です。それはまさに皆さんの決心と行動にかか

っています。そこで、私は東北大学総長として、また大学の先輩として、2つの期待を皆さんにお伝えしたいと思います(東北大学 2016)。

長い紹介となってしまったが、こうして実際に学長によるスピーチを見れば、なぜ「皆さん」が頻出語句のトップなのかがわかる。またここには「語学」や「コミュニケーション力」、「国際教養力」、「行動力」という語句が登場している。グローバル人材育成教育の観点からはおなじみの語句である。他方、人類社会が直面する課題の解決を目指して知的な格闘を続けるという表現は、トップ型大学の特徴の一端が表れている。

それぞれの学長式辞における頻出語句のトップ30を示したのが表3、表4である。トップ型に「英語」は入らなかったが、逆に牽引型に「学問」は入っていない。牽引型にある「文化」はトップ型にはない。国会審議の頻出語句は、学長式辞の語句とさらに趣を異にする。「スーパーグローバル大学」を含む段落を分析した結果が表5である。ここに登場する「支援」、「事業」、「重点」、「トップ」という語句は、学長式辞の頻出語句トップ30のなかには登場しない。

表3 トップ型頻出語句

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
皆さん	163	持つ	39
大学	135	人	39
研究	92	力	39
世界	92	科学	38
社会	89	環境	38
教育	72	自分	37
思う	67	自由	37
学生	66	自ら	36
本学	59	生活	36
入学	57	多く	35
学問	55	考える	34
年	51	日本	33
学ぶ	50	分野	33
国際	50	海外	31
キャンパス	40	京都大学	31

表4 牽引型頻出語句

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
大学	184	科学	54
皆さん	182	グローバル	48
世界	104	人	46
研究	97	持つ	45
社会	94	日本	43
本学	94	知識	42
入学	80	学部	40
学生	72	自由	39
思う	72	分野	38
教育	66	諸君	37
年	64	専門	37
技術	62	生活	34
国際	59	能力	34
自分	59	文化	32
学ぶ	57	英語	31

表5 国会頻出語句

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
大学	182	国務大臣	20
グローバル	68	外国	19
スーパー	60	思う	19
支援	54	徹底	19
委員	49	文教	19
教育	45	行う	18
科学	42	重点	18
国際	39	推進	18
事業	36	トップ	17
世界	27	下村	16
衆	26	国立	16
参	24	日本	16
研究	22	博文	16
創成	21	制度	15
文部	21	教員	14

グローバル人材育成を重要な目標の一つに位置付け、スーパーグローバル大学に選出された事実を前面に出す大学と、地球環境問題なども視野に入れて研究の前進を重視する姿勢との違い、さらには大学の国際競争力の向上を第一義的な目的とする事業の差異を確認で

きる。

トップ型のスーパーグローバル大学の学長の入学式式辞の共起ネットワークによる分析結果が図2である。図3が牽引型の学長式辞の分析結果である。双方とも図1と同じ方法に拠っている。

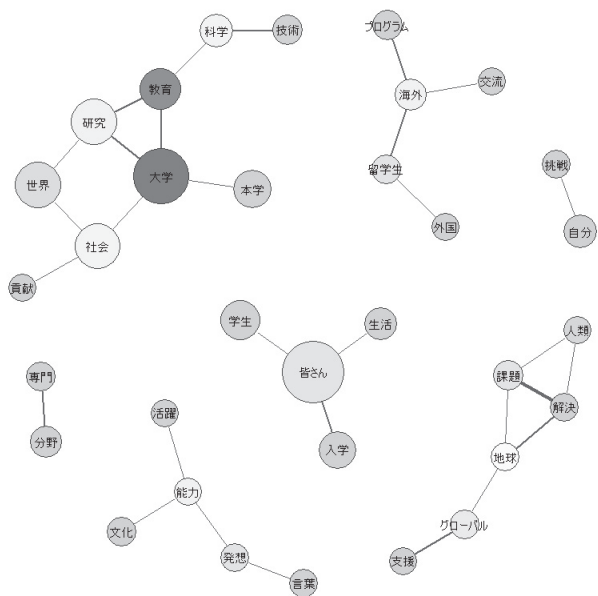


図2 トップ型共起ネットワーク

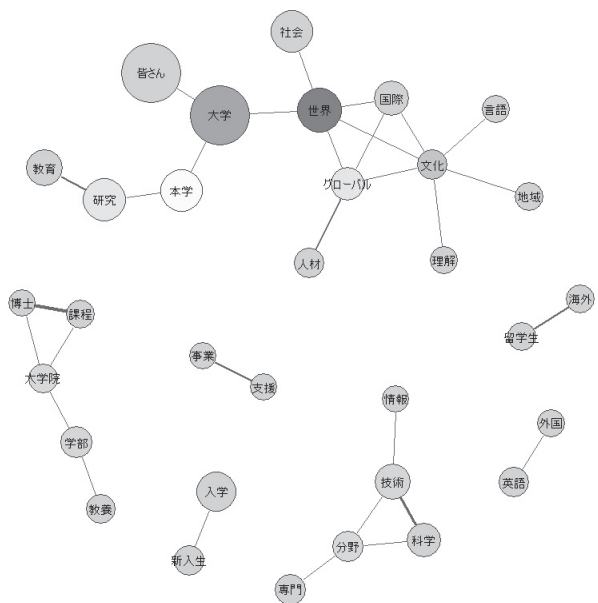


図3 牽引型共起ネットワーク

図2、図3には「社会」が登場しているが、図1にはなかった。上でも触れたが逆に「ランキング」は図1にあるが、図2、図3にはない。図2のトップ型では「課題」と「解決」が強い関係性を示すが、図3の

牽引型には「地域」と「理解」が登場して、大学として重視する指向性の差異も看取することができる。

すべての図において「海外」が現出し、それと共に「留学」あるいは「留学生」が現れている。留学を促すこと、あるいは留学生を受け入れることは、グローバルな視野に立とうとするときに高い優先度となっていることがわかる。

なお表5にあった「支援」と「事業」は、牽引型の共起ネットワークを示した図3のなかには現出する。これらは他の語句と線で結ばれていない。図1の「支援」「事業」が多くの語句と共に起の関係性を持つこととは対照的な出現である。

5. クロス集計分析

グローバル人材育成推進会議(2011)がグローバル人材に求められる能力を3つの要素に分けて示した定義は多く援用されてきた(表6参照)。この中から語句として鍵となる「語学力」、「コミュニケーション」、「主体性」、「積極性」、「チャレンジ精神」、「協調性」、「柔軟性」、「責任感」、「使命感」、「異文化」、「理解」、「日本人」を取り出した。また報告者自身は、グローバル人材はグローバルな課題に取り組む議論に積極的に参画できる人材であるべきだと考え、「英語力」、「アカウンタビリティ」、「クリティカル・シンキング」も鍵になることを主張してきた(三上2014)。またスーパーグローバル大学に関連しては、上の下村発言と国会審議の共起ネットワーク(図1)から「世界ランキング」、「留学生」、「海外」、「大学」、「日本人」の5つの語句の重要性が浮かび上がる。こうしたことから、これらを分析のためにコード化した(表7参照)これを用いてクロス集計分析を行った結果が図4と表8である。ここで「学長」についてはトップ型と牽引型を合わせたテキストを用いている。

表6 グローバル人材の3要素

要素I	語学力・コミュニケーション能力
要素II	主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素III	異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

グローバル人材育成推進会議 [新成長戦略実現会議] 「中間まとめ」(2011)に基づき作成

表7 コーディング

コード名	コーディングに用いた語句
グローバル人材	語学力、コミュニケーション、主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性、柔軟性、責任感、使命感、異文化、理解、日本人
三上定義	英語、社会、対話、説明、問題、解決、批判、クリティカル・シンキング、アカウントビリティ、市民性、シティズンシップ
スーパーグローバル大学	世界ランキング、留学生、海外、大学、日本人

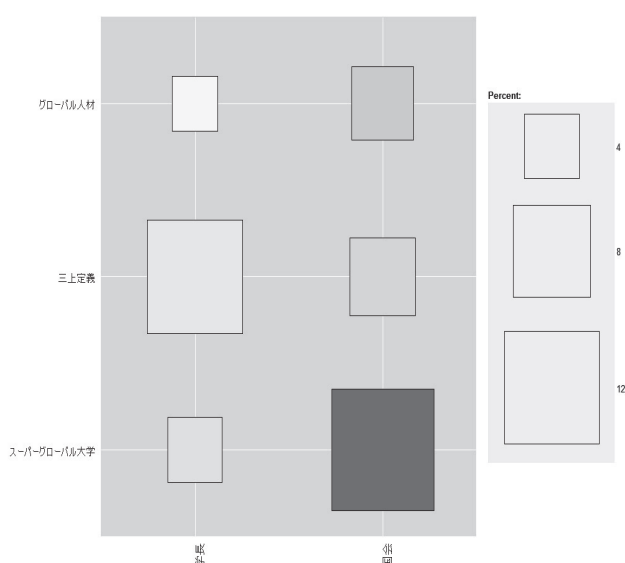


図4 コード出現率のバブルプロット

表8 コード出現率

	グローバル人材	三上定義	スーパーグローバル大学	全体のケース (文)
学長	55 (2.82%)	238 (12.21%)	78 (4.00%)	1949
国会	8 (5.10%)	9 (5.73%)	22 (14.01%)	157
合計	63 (2.99%)	247 (11.73%)	100 (4.75%)	2016
カイ二乗値	1.864	5.282*	30.018**	

** p<.01, *p<.05 (コード出現率に「学長」と「国会」で差があるかを見るカイ2乗検定)

この結果から、国会審議(図4と表8では「国会」と略記)では国の狙いとする「スーパーグローバル大学」が強調されていることは当然であるが、「グローバル人材」「三上定義」もそれぞれ5.10%、5.73%の関連

性を確認することができた。他方「学長」は国が狙いとする「スーパーグローバル大学」は4.00%、意外なことに「グローバル人材」との関連性も2.82%と低かった。「学長」と「三上定義」は12.21%の関連性を示した。

6. 結語

「スーパーグローバル大学」について、「国会」と「学長」との間に1%水準で統計的に有意な差があった。「学長」は必ずしも世界大学ランキングに執着しているわけではない。他方、筆者が定義した社会的な問題意識を有し、グローバルな課題に積極的に参画できる人材に関しては、5%水準で「国会」と「学長」の間に統計的に有意な差があった。あらためて筆者の定義のコーディングで用いた語を示すと、それらは、「英語」、「社会」、「対話」、「説明」、「問題」、「解決」、「批判」、「クリティカル・シンキング」、「アカウントビリティ」、「市民性」、「シティズンシップ」であった。この分析から、「学長」は「国会」と比較して新入生たちを筆者が定義するグローバル人材に導いている程度が大きいと捉えられる。

ここでは国会審議との相対的な比較を行った。国会の審議もグローバル人材育成を求める日本社会の要請を映し出している。それとの比較において、学長は新入生に対して、大学教育にふさわしいグローバル人材へと嚮導するメッセージの発出に成功している。

本稿はこれまでほとんど注目されることがなかった学長の入学式の式辞を、それぞれの大学教育の重要な指針が発出されているであろうことを前提にテキスト分析の対象とした。これをきっかけに学長式辞に対する関心が高まることに期待したい。日本の大学教育を分析する方法として発展可能性を有しているのではないだろうか。

グローバル人材育成の観点からスーパーグローバル大学に焦点をあてた。今後の課題として、文部科学省による選定に限定されない、規模は小さいながらも注目すべき人材育成教育を実践している大学にも目を向ける必要がある。単年に限らない学長式辞への注目も興味深い知見につながるかもしれない。さらに文部科学省の支援事業自体の成果も検証なしで済ますことはできない。残された課題も山積みではあるけれども、研究対象を広げて知見に結びつけること、あるいは研

究手法の進展という面で、本稿がわずかでも知的探求の点で貢献ができていれば幸いである。

謝辞

本稿は、2016年6月4日に産業能率大学自由が丘キャンパスで開催されたグローバル人材育成教育学会第3回関東支部大会における報告に基づいている。その際に勝又美智雄会員、八木智裕会員から貴重なコメントをいただいた。また匿名の査読者からの指摘は大変に有益であった。内容に関してはすべて筆者に責任があることはもちろんだが、記して各位に感謝申し上げたい。

注

- [1] 脳科学者の茂木健一郎はこの英語スピーチについて、「敢えて下手くそな英語を話す実際上の必要はないと思う」と記している。 <http://lineblog.me/mogikenichiro/archives/2351302.html> (2016年8月25日閲覧)
- [2] 八木(2013)は自らの学長スピーチに言及している。なお、大学によっては学長ではなく、総長、塾長などの呼称が、式辞の代わりに告辞が用いられている場合もあるが、ここではこれらをすべて「学長式辞」とした。
- [3] 行政の事業評価に論理モデルは有用である。詳しくはロッシ他(2005)を参照されたい。
- [4] 水平的アカウンタビリティに関しては、政治にかかわるアカウンタビリティを体系的に説明した高橋(2015)が参考になる。

引用・参考文献

- 1) 朝日新聞. (2014) 「『まるで詐欺』おこる選定校『スーパーグローバル大学』構想」4月26日夕刊.
- 2) グローバル人材育成推進会議. (2011) 「中間まとめ」: http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/110622chukan_matome.pdf (2014年11月13日閲覧)
- 3) 国会会議録. 2013) 「衆院決算行政監視委」6月21日.
- 4) 嶋内佐絵. (2014) 「グローバル人材育成と大学の国際化に関する一考察」『横浜市立大学論叢人文科学系列』66(1): 109-126.
- 5) 高橋百合子編. (2015) 『アカウンタビリティ改革の政治学』有斐閣.
- 6) 東北大学. (2016) 「平成28年度東北大学入学式祝辞」 <http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/president/01/president0102/20160406.html> (2016年5月24日閲覧)
- 7) 橋本鉦市. (2007) 「戦後高等教育政策における 이슈とアクター——国会・文教委員会会議録計量テ

キスト分析——」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』56(1).

- 8) 樋口耕一. (2012) 「社会調査における計量テキスト分析の手順と実際——アンケートの自由回答を中心に」、石田基広・金明哲編著『コーパスとテキストマイニング』10章、共立出版.
- 9) 樋口耕一. (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 10) 三上貴教. (2014) 「グローバルに民主主義を支える人材育成のための英語ディベートについて」『広島平和科学』35: 39-59.
- 11) 文部科学省. (2014) 「平成26年度スーパーグローバル大学事業『スーパーグローバル大学創生支援』申請・採択状況一覧」: http://www.jsps.go.jp/j-sgu/data/shinsa/h26/h26_sgu_kekka.pdf.
- 12) 文部科学省. (2016) 「0145 スーパーグローバル大学等事業」: http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/icsFiles/afieldfile/2016/07/15/ (2016年7月25日閲覧)
- 13) 八木浩輔. (2013) 「質問する学生たちを育てる、英語版本を海外出版する」『日本物理学会誌』68(5): 326-327.
- 14) ロッシ, ピーター・H、マーク・W・リプセイ、ハワード・E・フリーマン. (2005) 『プログラム評価の理論と方法』(大島巖、平岡公一、森俊夫、元永拓郎訳) 日本評論社.
- 15) Lave, Jean and Etienne Wenger. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge: Cambridge University Press.

受付日 2016年7月31日、受理日 2016年8月29日